

日本音楽教育の功労者

こやま

さくのすけ

小山作之助 (1864-1927)

潟町村に生まれる

1864年（文久3）小山作之助は、潟町村（現・大潟区潟町）で父作八と母トヨの長男に生まれました。1878年（明治11）地元小学校を卒業後、父の経営する石油事業を手伝いながら、夜は元高田藩士族小島堅吉の私塾で2年間漢学を学びました。

東京音楽学校の教授となる

1880年（明治13）作之助は上京し、大学予備門で一時学んだ後、築地大学（現・明治学院大学）を経て、1883年（明治16）東京音楽学校（現・東京芸術大学）の前身である文部省音楽取調掛^{とりしらべがかり}に入学しました。作之助は、学業優秀及び品行方正で6円の官給手当金を受け、1887年（明治20）の卒業後も研究生となりました。その後、同年には同掛を発展改称した東京音楽学校の教壇に立ち、1892年（明治25）の専任助教授就任を経て、5年後には教授になりました。

「夏は来ぬ」などの作曲をする

1891年（明治24）作之助は、最初の作曲集「国民唱歌集」を発表、この中には好評を得た軍歌「敵は幾万」が含まれました。また、「重音唱歌集」などの唱歌集や多くの校歌を作曲しました。とくに、代表曲となる佐佐木信綱作詞「夏は来ぬ」は現在も日本を代表する唱歌として親しまれています。

数多くの要職を歴任する

1905年（明治38）作之助は東京音楽学校を退きますが、東京高等音楽学院（現・国立音楽大学）、東洋音楽学校（現・東京音楽大学）などの設立に関わりました。また、日本教育音楽協会初代会長、小学校唱歌教科書編さん委員、日本楽器（現・ヤマハ）顧問などの要職に就き多忙な日々を送りました。

1927年（昭和2）6月27日、作之助は原稿執筆中に突然体調をくずし、65歳で亡くなりました。